
CLANNAD Short Stories -想ひ行き交う坂道で-

朝倉 由那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLANNAD Short Stories - 想ひ行き交

う坂道で -

【ZIPPED】

Z0745D

【あらすじ】

物語の舞台は光坂高等学校。Key作品として有名な「CLANNAD」のキャラクター達の短編集！突発で書くため更新日未定、キャラ順番未定！……そんなインチキ臭いショートストーリーです。真面目な話、「CLANNAD」のネタばれを多く含み、また、本編に近い文体を目指して執筆するので、未プレイヤ者への説明などは一切入れません。と言う事で、「CLANNAD」をやつたことがある人、ネタばれを気にしない、説明なくてもイケる、とい

う方以外の閲覧はあまりオススメできません。それでもと言つ方に
少しでも楽しんでいただければ嬉しいです！

IJとみ編「想い出の場所」 - 上(前書き)

ことみの短編です。『鍵作品』としての文体を田指しつつも、（ただし、まだまだ鍵つっぱれは出し切れていない感じです）『朝倉 由那』としての作風を崩さないようにしているため、いつものように半角7000~9000程度に収まるよう上下に分けました。

それでは、ことみ編「想い出の場所」。お楽しみください。

「こんなにむちむちはじめまして」
シンとした演劇部室。そこへ、たどたどしこながらも一生懸命な
声が響く。

「光坂高校の一ノ瀬ことみです」

俺は、椅子に逆向きに股を開いて座り、前のめりになりながら背
もたれに体重をかけてジッと見ていた。

「趣味は読書です」

ここまでは順調だ。と、声に出でず口づく。何度もやつてきた挨
拶だから馴れてきているんだろう。

「もしよろしければ、お友達になつてくれると嬉しいです

「違う違う！」

馴れがきているが故に、いつものバージョンに戻つてしまつてい
た！

「そこは『つたない演奏ですが、聞いていただけると嬉しいです』
だろ」手を振つて制止しながら言つた。

夏休み半ば。授業が無いにも関わらず、俺とことみは学校に来て
いた。しかも一人つきりで。

「もう少しだな。本番はもっと緊張するだらうからもっとスラスラ
言えるようにしないとな」俺の前で気をつけをすることみに言つ。
「うん。頑張るの」健気に頷くことみ。その姿もかなりかわいいと
感じてしまうが口には出さないでおく。リアクションが手に取るよ
うに分かる。

『…………』何を言われたのか分からぬのか、いつも
通りに動作不良を起こす。

テレビか何かならバンバン叩くところだが、相手はことみだ。ジツと待つことにする。

『…………あつ』

回線が繋がり、顔が一気に赤くなる。照れながら俯いてしまう。

……なんてことになってしまったに違いない。そうなれば練習に支障をきたすのは目に見えていた。

「よし、ことみ。もう一回だ」

「うん。…………こんにちは、はじめまして…………」

ことみが、始めからセリフを繰り返す。俺は椅子の上でそれを眺めるのに戻った。

今、ことみが何故、挨拶の練習なんかをしているのかと言ひと、全て杏の企みのせいだった。

（数日前）

「今度、ことみのヴァイオリンの発表会するから」

ある放課後、なんの前置きも無く、その女は言った。

「…………頼む。もう一回言つてくれ」

「今度、ことみのヴァイオリンの発表会するから」

俺の頼みを素直に実行する杏。

「…………マジか？」色々な意味を込めて聞いた。春にことみの発表会をやつたのはまだ記憶に新しい。あの音を忘れるのは無理だった。「大マジよ。せつかくヴァイオリンをプレゼントしたのに、まだあたし達の前でしか弾いたことないじゃない」手を腰に当てながら杏が言った。

「ことみちゃんはそれでいいですか？」姉の独壇場を見兼ねたの

が、藤林がぼうつ、と呆けたようにしてこる」とみに尋ねる。

「嫌なら無理にやらなくてもいいんだぞ」俺はそう言つた後に気付いた。

「私は別にいいの」

果てしなく愚問だつたといつことを。ひとみが、そんなことを『嫌だ』なんて感じるはずがなかつた。

「ことみちゃん、頑張つて下さいね」古河が胸の前で手を握りながら励ます。

「何言つてんのよ部長。部長もやるのよ」笑顔の古河に向かつて杏が告げる。

「…………古河も、とは？」言葉の意味するところが分からぬ。

「せつかく発足した演劇部よ。何かやらないと勿体ないじゃない」「つまり、演劇部としての演劇もオマケでついてくると？」

俺の非難めいた視線を無視しながら杏が古河の肩を叩く。

「頑張つてね、演劇部長！」

「わつ、私、また悪の演劇部長をやらないといけないんですか！？」いい加減、その役も板についてきた古河だったが、あの新喜劇風漫談は演劇部としてやる…………いや、やつていい演目ではなかつた。「部長がやりたい演目で良いわよ。でもそこまで長くしないでね」「は、はい…………やれるだけやつてみます」

杏の言葉に古河は力無く頷いた。

「…………ところで「誰も尋ねる気配が無く、また杏も説明するようなそぶりを見せないため俺が聞くことにした。

「その会場つてのはどこなんだ？」

（時間戻つて現在）

「呼ぶ時はことみちゃん」

「だ～！ 何回間違えてるんだ！」

本日何回目か分からぬ駄目出し。表情からは分からぬが、本番を想定してやると緊張するらしい。

「ジジイ相手なんだから特に気にしないで普通にやればいいんだよ」とみのヴァイオリン発表会アンド悪の演劇部長ご披露会の会場は近所の老人ホームだった。どうやったのかは知らないが、真っ当な方法でこぎつけたらし。

「でも、やつぱり緊張するの」ことみは肩を落としながら言つ。こんな様子を見ると、本当に全国模試トップテン常連なのか疑いたくなる。

「大丈夫だ。多少噛んでも、爺さん婆さんが相手なら何も言われないから」

「…………」ことみは小さく頷いた。

その時、演劇部室のドアが開く。

「朋也～、ことみ～、順調？」

悪の元凶が現れた。と言つても、貧乏姉妹から口ボを奪おうとする悪の演劇部長ではない。

「まあまあだな。そつちはどうなんだ？」適当な椅子に腰を下ろした杏に尋ねる。

「そうね～、部長と椋が一人芝居風にやるみたいだから準備はそんなに大変じゃないみたい。今は演技練習よ」長い髪を揺らしながら言つ。

古河と藤林は杏と一緒に練習していた。本来、（名ばかりの）演劇部員である俺もそつちに行くべきなんだろうが、特にする事も無いようなので、ことみの側に就いていた。

「ボケオンリーのゆるゆる系漫談じゃないだろつな？」

「老人ホームの人相手にそんなことしないわよ。普通の昔話みたいよ」

古河達も色々と考えているようだ。演劇に関しては素人と言つて

いたが、古河と藤林なら、最悪でも普通の演劇に仕上がるだらう。
「んで？」 ことみの方はどうなの？」 杏はことみを見ながら聞く。
「…………」 ことみは杏の前までトコトコと歩いて行き、軽く頭を下
げた。

「ここにけま、はじめまして。光坂高校の一人瀬ことみです」 こと
みはたゞたゞしく挨拶を始める。

「趣味は読書です。つたない演奏ですが聞いて頂けると嬉しいです。
一曲目は私の大好きな曲です。一生懸命引くので聞いてください」
簡単で子供っぽい、だがことみらしい挨拶をした。春に作った自
己紹介のアレンジだが、ことみらしくてよかつた。

「ちゃんと言えてるじゃない。これなら大丈夫ね」 杏がことみの頭
を撫でながら笑う。

「まあな。ずっと練習してたからな」

「もう間違えないの」

俺が笑いかけると、ことみは恥ずかしそうに頷いた。

「それでさ、この後部長と棕がここで練習するって言つてたから」

「は？」

杏に聞き返す。そんな話は寝耳に水だつた。

「古河ん家で練習してたんじゃないのか？」

「BGMとか小道具とかはここにあるらしいからひいて来てやる
んだつてさ」 俺の問いに軽く答える杏。

「じゃあ、ここじゃヴァイオリンの練習出来ねえじゃねえか」

「わうねえ…………どつか別の場所でやつてきしよ」

無責任なことを言つてのける杏。俺は反論する気も起きず、た
だ力無くことみを振り返つた。

「朋也君、図書室でやろつ」

名譽図書委員の話、『ことみ』と書かれたプレートのついた鍵を
取り出しながら答える。

「図書室か…………夏休みだから誰もいないうつしな。良いんじゃ
ないか？」

平日ならば放課後といつ時間帯の今だが、夏休みなら使つてゐる奴は誰もない。休みの日と同じ要領だ。

「終わつたら呼びに行くからさ。頑張つてやつてきなさい」杏がことみの頭をポンポン叩きながら言つた。

「頑張るの」ケースに収まつたヴァイオリンを取りながらことみは頷く。

「じゃ、古河と藤林によろしく言つとこてくれ」俺はことみの脇に立ちながら手を振つた。

ギュッ！

「あんたはまだ」

手に軽い抵抗を感じる。見ると杏が俺の袖を引いていた。

「あん？ 何か用か？」振り返る。そこには何かを企む杏の顔。まずい。良くない兆候だ。

「ちょっとね。ことみは先に行つてて」ことみに軽く田配をする。ことみは一瞬首を傾げたが、軽く頷くと図書室に向かつた。

「何の用だよ？」僅かに警戒する。この顔の杏は、俺にとつてあまりよろしくない事しか言わない。

「あんた、最近ことみと一人きりになつてないでしょ？」杏が俺の耳に口を近付けて言つた。

「は？ さつき一人きりだつたじゃねえか」杏に言つて返す。

「ことみと一人きり。それはまさに先程までの状況だ。それに、最近はことみと一緒に練習を繰り返している。そう考へると、杏や古河と一緒にいる時間よりも長いはずだ。

「そうじゃないわよ、バカ」杏が呆れ顔で言つた。

「ことみと一人で遊びに行つたりしてないでしょ、つて言つてんのよー」

ああ、そういう事が。確かにそういう時間はなかなか無かつた。

期末試験に（俺だけが）苦しめられ、更に杏の企画だ。

（まあ、期末はことみに言われて一緒にやつたからいいけどな）

普段は試験なんか気にも留めない。だが、ことみの『朋也君も勉強しないといけないの』ところ、意外にも強い押しを受け、勉強するはめになつてしまつた。

まあ、ことみのマンシーマンの指導のお陰でそこそこ良い成績を取れた。と言つても、毎回に比べれば、だが。

とりあえず、そんなこんなでことみと一人で遊びに行つたりする時間は全然作れなかつた。

「確かにそつだが……半分はお前のこの企画のせいじゃねえか」

杏を見ながら溜め息混じりに言つ。

「だから、さすがに悪いかなーって思つたのよー。明日は練習休みでいいわよー」

逆ギレ氣味に言われる。理不尽を些か以上に感じるのが戻らないことにする。

「何でわざわざ俺だけに言つ?。ことみにも言えれば良こじやねえか」とつめあえず疑問をぶつける。

「あんたがあたしに頼み込んで休みを取つた、つて言えば、ことみは『朋也君、私のことそんなに考えてくれてるんだ』って顔赤くて喜ぶわよ」

ことみのマネ（と思われる言葉遣い）をしながら杏は言つ。

「もうフラグ確定でことみルート一直線ね」

つこでに訳の分からぬことも言つてくれる。

「はあ……分かつたよ。ことみを『データに誘えばいいんだが』」

頭を搔きながら言つ。

「そつよ。あたしと棕と部長は普通に練習するけど『気にしないでいいからね』

「いや、そんなこと言われたら気にしちまつんだが」

杏の言葉にシッコミを入れておく。

「つたべ。まあいいわ、早くことみのトコに行きなさい。待つてるわよ」杏は俺の背中を押して笑いながら言った。

「…………サンキューな」

「あたしに礼なんか言ひてないで早く行きなさいってー！」

杏の言葉に頷きながら演劇部室を出て、まっすぐ図書室に向かつた。

図書室のドアは少しだけ空いていた。そしつ、俺はいつかのようにつつ手に手をかけ、中に入つて行つた。

（図書室）

図書室は「じみ」と再会した時と同じように暖かな日だまりとなっていた。そして……

「…………」
あの日と同じように、じみは床にクッションを敷き、裸足になって本を読んでいた。ただ、本は手に持つ一冊のみで、傍らにハサミはもう無かつた。

「待たせ過ぎたか…………」俺をただ待ってるのも退屈だつたんだろう。

「「じみなつたら呼ぶしかないが…………」いつか、色々と邪魔をしてみたが効果はゼロだつたことを思い出す。

「じみちゃん以外で反応するか試してみよつ」ただ呼ぶのも面白くない。少し遊んでみよう。

「「じみ、じみ、じみ…………」

「まあ手始めに、前と同じように連呼してみる。

「…………」
効果は相変わらずのようだ。

「「じみ」」テンション高めに呼んでみる。

「…………」変化無し。

「「じみ」」恨めしげに呼んでみる。

「…………」全く反応しない。

「「じみ」」獨り言で呼んでみる。

「…………」くんじがない。ただのしかばねのようだ。

「ことみ君……」

「ことみ！ 助けてくれ！」

「ことみっ！ 火事だ！」

「ジョン・斎藤、参上！」

「ことみ、それと便座カバー」

君付けで呼ばうと、助けを求めるようと、火事だと知らせても、春原の後輩の振りをしようと、語尾に『それと便座カバー』をつけようど、眉一つ動かさない。

「…………」

さすがに、春原が横で暴れてても全く気付かないだけある。奥の手以外では反応しないようだ。

しかし、俺がアホな遊びに従事している間にことみは本を半分ほど読み進めている。

「…………そろそろ起こすか」深く息を吸い込む。

「…………」ことみちゃん

「あつ…………朋也君」

奥の手の効果は絶大だった。

「杏ちゃんとのお話しさ済んだの？」ことみは軽く首を傾げながら尋ねてくる。

「ああ。まあ大したこと無い話だつたよ」明日のこととは練習の後に言つことにした。杏の言つように赤くなつたりして、回線が今シヨートするのには厄介だ。

「じゃ、練習するの」ことみは立ち上がりつとする。

「いや…………」俺は考えるよりも先に手でことみを制していた。

「？？？」久々のハテナマーク三本。

「ことみ、まだ本読み終わってないだろ？」ことみが開いている本を指差す。半分以上は読んでいるがまだ結構な量が残っている。

「うん」

「読んでて良こよ。とつあえず、最後までは
「…………？」

俺の言いたいことが分からないらしい。首を傾げ、再び頭上にハテナマーク三つを出している。

「だから……最近はこんな感じの時間が無かつたから、今はのんびり本読んで良いよって言つてゐる」一言一言、ゆっくりと吐げる。俺の言葉を噛み締めるように幾度となく頷くことみ。

「うん……朋也君、ありがとう

ほわつ、と微笑みを浮かべると、再びクツシヨンに腰を落ち着ける。

それから、絶対防御状態になるまでは一瞬だった。目が左右を行つたり来たりし、身じろぎ一つしなくなる。

「ことみ…………」名前を呼んでみる。しかし、もう返事は無い。

「早いな…………ことみ？」疑問形にしてみる。やはり返事は無い。

「…………」さすがにネタ切れだった。

「…………寝るか」読み終わるまで寝ることにする。読み終わったら起こしてくれるだろう。

机に突っ伏す。暖かい口だまりの中、ことみがページを送る音だけが響いていた。

一学期にはこうしてことみの側で、心から安心して眠ることは何度もあった。ことみが杏や藤林、古河と友達になつてからはじめつぽう減つたが、やはりここは俺とことみのルーツなんだ。

そんなことを考えながら、俺は眠りに落ちていった……

気が付くと演劇部室にいた。そこでは古河が水筒を一生懸命に振つていた。

「…………何、やつてるんだ？」古河に尋ねる。

「一度冷やしたパンの煮汁はよく振ると香りが変わるものですよ」

「またか！？ またパンの煮汁なのかー！？」

思わず古河の言葉に戦慄する。

「朋也君、ここ曲がる～」俺の背後から、図書室で本を読んでいるはずのことみの声がした。

慌てて振り返ると、いつもの腕の屈伸をしてこる。「逆にも曲がる～」そう言つて間接の口回りを無視してありえない方向へ腕を曲げた。

「んなつー？ お前、腕つー？」「

「曲がる訳おまへんがな～」

驚いた俺を見ながら腕を元に戻す。

「いやいやいや、今曲がつてたぞ！」

「腕が逆に曲がらない私は岡崎君の妹にはなれません」

ことみにツッコミを入れていると、背後から意味の分からん藤林の声が。

「でもパンの煮汁が大好きなお姉ちゃんは岡崎君のお母さんになれます」

「いや、腕が逆に曲がる妹はいらんし、パンの煮汁が好きな母親もいらん」

あのマジメな委員長が支離滅裂なことを言つてこる。こういふな意味で恐怖を感じる状況だ。

「今の朋やは溢れ返るパンの煮汁の香氣によつて、心理状態が興奮状態に強制的に変換されるのよ」

杏が神妙な面持ちで言つ。

「お前、またパンの香氣にあてられたか？ 口調が変わつてゐる。文法も変だしよ」

「きつとあたしの肘が逆に曲がらないからね。今、あたしは非常に追い詰められてるのよ」

杏までもが訳の分からなこと言つやがる。

「これは……夢なのか？」自分に尋ねるよつに呟く。

「そうや。」これは夢だ」

突然、俺の眩きに返答が。ゆつくつと振り返ると、春原が杏に肩車にされていた。

「春原……」

「これは夢だ。その証拠に、今の僕は一ノ瀬ことみよりも頭がいい」春原は杏の頭上でいつか聞いたようなセリフを呟く。どこで聞いたのか思い出そうとして、自分が春原に言った言葉だと気付く。

「岡崎、お前はオーストラリアの首都はメルボルンと思っているが実は違うのや。その名はキャンベラだ」春原は自信満々で俺に言った。

「マジか…………？」

「キヤンダルを立てたベランダと覚えたらしい」

春原は髪を搔き上げながら頷く。

「…………これはあの時の復讐なのか？ なあ、春原？」弱々しく尋ねる。色々と気力が失せる状況だ。

「違～う！ パンの煮汁に倒れただんご大家族のドボンジョだ！」

「…………リベンジと言いたいんだろう。

「これが夢なら…………現実の俺は何をしてるんだ？」

「校長室で杏にパンの煮汁の風呂に入れられるところなんだ」

本当ならば非常に恐ろしいことを春原は言った。

「マジか…………？ どうすれば目が覚めるんだ？」

「今すぐ僕と岡崎でだんご大家族を歌うんだ」

絶望した俺に、春原が爽やかに笑いかける。

「…………お前、キャラが変わつてないか？ 口調も変だ」

「これはパンの香氣のせいだ。それよりも岡崎。今すぐ歌うぞ」

素朴な疑問を軽く流し、春原は演劇の小道具のメガホンを手に取る。そして息を吸い……

次に聞こえて来たのは春原のだんご大家族の歌ではなかつた。空間に響く音は、懐かしい感じがするあの音色……

「…………ヴァイオリン？」

優しいヴァイオリンの高音だつた。周りの景色はいつの間にか演劇部室から真っ白な空間に変わつていた。杏、藤林、古河、春原、それのことみの姿は消えている。

支離滅裂な悪夢はいつの間にか終わり、俺は一人で鳴り響くヴァイオリンの音に包まれていた。

「ことみのヴァイオリンか…………？」小さく呟く。それは、あの日、初めてことみの家の庭で聞いた、あの曲だつた。

…………きっと、目が覚めればそこは一ノ瀬家の庭。あの、真っ白なテーブルと椅子で寝てるんだ。側では、ことみがヴァイオリンを弾いて、俺の寝顔を眺めるんだろう。

「起きなくちゃな…………」そう自分に向かつて呟く。ことみは今、俺が起きるのを待つてるんだろう。

小さい頃に別れてから高校までの間、俺はことみを待たせてしまつた。これ以上、ことみを待たせるような真似をしてはいけない。

俺は静かに目を開く……

「ん…………」

俺の目に飛び込んで来たのは、自分で作り直したあの庭ではなく、図書室の本棚だつた。

「…………ことみ」

ことみは、いつも本を読んでいる場所でヴァイオリンを弾いていた。目を閉じ、一つ一つの音を確かめるようにして……あの日の曲を引いていた。

途端に演奏が終わる。俺の声に気付いたんだらう。

「おはよう……朋也君」ほわつ、と微笑むことみ。それだけで安心感が俺を満たす。

「ああ。おはよ、ことみ」だから、自然に返事が出てきた。

「よく眠れた?」

「ああ……ぐつすりな」

首を傾げることみに笑いながら答える。窓の外を見ると、既に空は橙色に染められていた。

「悪いな、寝ちまつて」フウツ、と息を吐きながら言つ。

「ううん……私、朋也君の寝顔見るの、大好きだから」

いつか聞いた言葉がかけられる。ことみの言葉に頬が緩む。

「俺も、ことみの側で寝るの好きだからな」

俺も同じ答えを返す。

俺達は再会した図書室にいた。今まで、一人で幾度となく時間を重ねたここ。一ノ瀬の庭が第一の始まりだつたのなら、ここは第二の始まりなんだろう。あの庭が大切な場所なのと同じで、この図書室は俺とことみの大切な想い出の場所なんだ。

「なあ、ことみ……」

「???

突然口を開いた俺に首を傾げる。

「明日、杏から休みもらつたんだ。一人でどうか行くか?」昼間、杏に言われたことを言つ。

ことみは軽く首を傾げたが、すぐに首を横に振る。

「…………いいのか? 最近二人で遊んだりしてないけど」ことみに尋ねる。しかし、俺は心ではことみの考えが分かつていた。

「いいの……」ことみは小さく頷く。

「今日、朋也君とここに来れたから……」

ことみと俺の考えはやはり同じだつた。一人で出掛けるのも悪くはないが、俺はここでことみと一緒にいるだけで十分だつた。

「…………そうだな。俺も……そう思つてなんだ」小さく微笑む。

「それに、改めてじっか行くとしても、JJJに来ることになつそうだしな」

俺とことみの（一入りでは）初めてのデート場所だ。遠出して遊ぶのも悪くはない。だが、俺達が一番落ち着くのはここなんだ。「うそ。私は朋也君がいてくれればいいから」僅かに頬を朱く染めることみ。

俺の存在がことみを安心させるなら、少しでも支えになるのならそれは贅沢なことだと想つ。

ことみと出会う前、他人を拒絶して、家族を拒絶して、一人で暮らしていた俺にとつては。

「ことみ……」

「ことみの」ことみがじりじりつもなく邊おしづなつて、ことみの存在を感じたくなつて、俺はことみを抱きしめていた。

「あつ……」驚きの声を上げるもの、俺に身体を預けてくれる。あの時……ことみを過去の呪縛から解き放つてあげられたあの時と同じく、優しく、それでいて確かに抱きしめる。そして……

「ん……」

田を開じ、優しく唇を重ねる。唇を通して、ことみの暖かさが伝わつてくる。

「…………」唇が離れると少し寂しさを感じる。

そんな感情を隠すようにことみの頭を搔き混ぜるようになれる。ことみは気持ち良さそうな表情で身体をあずけてくれる。

ガラツ

突如、図書室のドアが開く音がした。振り返ると、杏に加えて古河と藤林がいた。

「やつほー……つて、あららー？ お邪魔だつた？」

杏はことみを抱きしめる俺を見ながらにせんにやる。

「いや…………いいよ」俺はことみを離すと杏達に向き直った。

「おおお岡崎君！ わわ私達は、ななな何も見てないので、それも
や氣にしないで下せー！！」

俺やことみよりも、藤林の方が真っ赤になっていた。

「さすがは岡崎さんです」古河が意味の分からぬことを言へ。

「やつぱり岡崎さんはことみちゃんの彼氏です」

「…………」微笑む古河は俺とことみの顔を交互に見て、また更に一
口一口する。

「んで？ 明田の話はしたの、朋也？」

真っ赤な藤林と「…………」している古河を尻目に、杏が俺に聞く。

「ああ。だけども、やつぱりいこよ」

「へつ？ いい、つて？」

俺の言葉が理解できていないようだった。

「もういいんだ。今まで一人きりでいたから」ことみの頭に手
を乗せながら言つ。

「うん。私はここで朋也君と一緒にいるだけでいいの」

「それ…………みんなでいるのも楽しいからな」

俺とことみは微笑みあつ。それで杏は納得したようだつた。

初めは、「…………」ことみが一人になれる場所だった。

次に、俺とことみの再会場所になつた。

そしていつしか、俺やことみが何度も過ぐす場所になり……

最後に、俺達にとつて心が休まり、安心できる場所になつていた。

「…………」ことみは卒業し、「…………」に来ることが無くなるかもしない。それ
でも、ここはここまでも、俺達の大切な“想い出の場所”なんだ……

...

と言つ事で「J」とみ編でした。いかがでしたでしょうか?

少しでも「CLANNAD」らしさを感じられたら嬉しいですね。

Jの短編は大分前に書いたのを書きなおしたものなので、内容は稚拙と思います。

ギャグシーンとシリアスシーンの切り替えが上手くできてないような……

アニメが始まり、あの感動が再び……そしてJの短編の存在を思い出し、投稿することにしました。

ぶっちゃけると下だけで十分な気がしますが、どうせなので全部投稿しました。

それでは、次回がいつで、一体誰の短編になるかは作者である私にもわかりませんが、楽しみにしていただけると非常に嬉しいです。「CLANNAD」と言う大作の短編なので、本編と比べるとまだ幼稚な文章ですが、

感想や評価を頂けたらとても嬉しいですので、好評でも酷評でもぶつけて下さい。

それでは、無駄に長い後書きも、Jの辺で失礼します。次回も楽しみにしていただけたら光栄です。

（クリスマス・中庭）

「遅えな……」北風の冷たい中庭で、一人寂しく石垣に腰をかけた。息を吐くと水蒸気が凝結して白くなる。空は快晴。残念なことにホワイトクリスマスの気配は全くない。まあ、別に雪が降つたところで寒いだけで良い事なんざ一つとして無いんだが。

俺が冬休みだってのにわざわざ学校なんかに来るのは 完璧に自業自得なのだが 補習と就活を強制させられてるからなのだつた。

「だりい……」マジで怠い。だが、さすがにこれ以上うかうかしてられなかつた。棕は看護学校、杏は教育学部志望、更に春原までが実家の方で就職先を見つけている。このままでは春原以上の甲斐性無しになつてしまつ。それだけは避けねばなるまい。

「それに、杏もいるんだしな」

そう。これまでと違い、卒業後も杏と付き合つていいくつもりなら、俺一人でアイツを守れるだけの力を付けねばならない。学校や親の庇護から離れ、俺だけの力でアイツの笑顔が作れるように……

「俺も変わつたな……」らしくなく感傷的になつてゐようつだつた。これもクリスマスの魔力なのか。それとも杏や棕と一緒にいることで俺自信の心の闇が埋められていつてゐるのか……まあ、そんな事を自問したところで答えなんか返つてくる筈もなく。

ありがたいことに、冬休みだといつても関わらず杏は弁当を作つてくれてる。だが、今日は杏にも用があるらしく、俺と入れ違いに職員室に入つて行つた。

「ま、いつも待つてもらつてる分、たまには俺が待つか」杏は必ず俺が出て来るよりも早くここに来て待つていた。『寒いだろうから、もっと遅くても良いぞ』と言つても『待つてゐるのも女の子にとつては楽しいの』とか言つて聞かなかつたのだから俺がそこまで気にする必要はないのだが。

「朋也ーーっ！」

噂をすれば、大声で名前を呼びながら昇降口から出てくる杏が現れた。幸いなことに冬休みだから中庭には誰もいない。部活の連中は文化部棟かグラウンドにいるだろうし。

「何度も言つが、大声で人の名前を呼ぶな」

「別にいいじゃないの。減るもんでもないんだし」

まつこと、細かいことはとことん気にしない女だ。まあ、そんなとこもあるからこそ好きになつたと言えばそうなのだが……

「…………？ どうしたの？ 顔、赤いけど」

「なつ、何でもねえよっ！」

「？ まあいいわ。早くお毎にしましょ」

自分で考えておきながら赤面するとはなんとも情けない。やはりクリスマスの魔力か、どうも思考が浮いた方向へ偏つてゐる気がする。

「とこりうだ……」

「ん？」

突然口を開いた俺に首を傾げる杏。その手に握られてゐる者に對して何の疑問も感じていない様子。

「一体全体、その馬鹿デカイ弁当箱は何だ？」杏の手に握られる風呂敷を指さす。

そこにあるのは二人分とはどつ巣廻田に見たところで考えられないほどの巨大な塊、もとい弁当箱があつた。いつか使つてゐた重箱、と言つてはなくステンレス製のようだ。今日の飯は洋風なのか？

「何つて、普通のお弁当なんだけど」右手を上げる。そこに握られ

る驚異的なサイズの弁当。軽く十五センチ立方くらいはあるだろ？
「馬鹿言つな。一人で食いきれる量じゃねえぞ。これは新手の嫌が
らせか？」

「失礼ね～。せっかく作ってきたのにそんなこと言つてたら食べさせ
ないわよ～！」

「なんこと言つたつて……さすがにこりやあ俺とお前じや残つち
まつのが目に見えてるぞ。お前だつてそこまで食わないだろ」「
引かず文句をつける。食わせてもらつてる以上、残すのは俺と
しては非常に後味が悪い。何の魂胆があるのか。

「…………もしかして素でそんなこと言つてんの？」

「紛れもなく素なんだが……世間一般ならこの状況でその弁当箱
の意味が理解できるのか？」

「はあ～、と大げさに溜め息をつく杏。やれやれと呆れられると、
むつとなるのを禁じえないんだが。

「アンタつて本当に鈍いわねえ……今日が何月何日だか言つてみ
なさいっ……」手を腰に当て、仁王立ちの杏。ただ、片手には巨大
な弁当がある訳で、そこまで迫力は出でない。

「何日つて……普通に十一月二十五日だろ？」

「…………そこまで言つて分かんないのなら真正の馬鹿よ。阿呆よ。
まぬけよ」

罵詈雑言を撒き散らす杏。なんだ、今日は結構しつこいな。いつ
もならこの辺で切り上げてるのに。

「今日は二十五日、クリスマスつ！ 聖キリストの誕生日でしう
がつ～！」

クリスマス…………まさかこの女までがそんなものを気にしてると
は。しかし、それがどうしたら巨大な弁当につながるんだろうか？
「いや、クリスマスなのは俺だつて知つてる。だが、それが巨大な
弁当箱に行きつく道理が全く理解できないんだが」
「だから～。クリスマス用に手をかけて作つてたらかなり多くなつ

ちやつたつてことじやないのよ……」

……世間一般ではこの理不尽な道理がすぐ分かる」ととして通つてしまつたのだろうか？ だとしたら、俺は学校だけでなく世間一般の常識から見てもはみ出し者と言う事になつてしまつんだが、それはさすがにショックでかいぞ。

「威張つて言う事じやないと思つんだが」

「はあ、彼女持ちら相手の気持ちを察しなさこよ。料理好きなら間違いなくこうなるわよ。全く、アンタの彼女になる人も可哀想ね」
今現在、俺の彼女やつてるのアンタですから。

「……まあ、今はおとなしくその理不尽な言動を甘受するとしてもだ、食こきれなくとも文句言つなよ」

「まあまあ、中身見たらそんな心配も吹つ飛ぶから大丈夫よ」
えらいく自信満々な杏さん。自分の腕には自負を持つてることいつだが、ここまで自信たっぷりなのはけつこう久しぶりかもしれない。
「んじやあ、そこはかとなく期待するか」

（数分後）

中庭の石垣に腰を落ちつけ、弁当の用意をする。と言つても風呂敷広げて蓋を外すだけなのだが……

「さあ、見て驚きなさいつ……」

とか言つて、杏がじらしてるのでから一向に飯が始まらん。

「いいから早くしろ。あんまりじらしても逆効果だ」空腹が行き過ぎると感動する余裕もなくなるつてもんだ。

「ホントにムードのかけらもないわね……まあ良いわ。ではでは、お披露目～」

パカツ、と音をたてて蓋が外れる。そこに鎮座するは色とりどりの食材。杏が自信を持つのも頷けるほどに豪勢な内容だ。ロースト

チキン、マッシュポテト、ミートソースのスペゲティ……眩いばかりのレパートリーが三段弁当に詰まっていた。

「ん? 下段はどうしたんだ?」杏は下段を開けずに隠したままにしていた。

「それは食後のお楽しみ。上の二段ならなんとか食べられるでしょう?」

「そういう事か……」

何が入ってるのかは全く読めないが、確かに上の二段なら一人でも食いきれる量だ。

「そいじゃ、早速……」

「ゴメン、朋也。ちょっとトイレ」片手でゴメンの構えを取りながら杏が立ち上がる。

「…………いただきます出来なくなつちまつたじやねえか

「だから、ゴメンって言つてるじゃない」

頬を膨らます杏。ふての杏をもつしばり見ていたかったが、それでは飯が遅れる一方だ。

「待つてやるから早く行つてこい」

「すぐ戻るから、ゴメンね」

弁当を田の前に待たせることが悪いことだと思つてゐるのか、珍しくゴメンを繰り返していた。バイクで鬼いた時よりも多いのもどうかと思うが。

「しかし……」便所に行くなら、行った後で蓋を開けてもらつたかった。田の前には上手そうな弁当、思わず手を出したくなる。

だが、待つと言つた以上待たなきやいけないし、杏に作つてもらつておいて先に一人で手を付けるのは気が引ける。

「素直に待つか」これが春原とかの弁当なら待つことなんて無いのだが。

「ん? 岡崎、一人で何してんだ?」

噂をすれば何とやら、春原がパンを片手に歩いて来た。こいつも

俺と同じく補習＆就活組なんだが、さつきも言つたように就職は結構なところまで決まつてゐるようなので、日程は俺よりも大分楽そうであつた。

「杏を待つてゐるだけだ。何も無いからあつち行け」シッシッと春原に手を振る。

「杏？ もしかして、この弁当作つたのつて……」

「ああ、紛れも無く杏だぞ」

疑わしそうな目で弁当箱を覗き込む春原。

「マジかよつ！？」あの藤林杏がこんなに美味しいそうな弁当を！？

……委員長の間違いぢやないよね？

「そんなに信じられないのか？」

「いや、信じない訳じやないけど……」

珍獣とかだんご大家族とかを見るような目で弁当を凝視している。

「…………どれどれ？」

「あつ」

止める間もなくマッシュューポテトに手を伸ばす。口に放り込みもぐもぐと咀嚼すること数秒……

「…………ぐどいようだけど、これ、本当に藤林杏が？」

「しつこいぞ。棕が髪を伸ばして杏の振りをしてるんじやなければ間違いなく杏だ」

俺よりも先に弁当に手を付けたのもムカつくが、杏の料理をこうも否定されるのは更にムカつく。相手が春原だと尚更だ。

「だつて、あの藤林杏だよ？ ガサツで、男勝りで、常に喧嘩腰で

「…………」

「…………おい、春原」

「辞書投げるし、色氣も無くて、可憐さの欠片も無くて……」

「お～い、春原～」

「オマケに凶暴で、胸もべつたん」。それでこんな弁当作るなんて想像出来ないよ

言いたいだけ言い切つたらしい。満足げな顔で俺を見る。

「満足そういう悪いが、後ろ見た方がいいぞ」「えっ？」

春原が振り向こうとした瞬間！ 肩に手が置かれた。それはもう右でも砕きそうな勢いで。

「陽平？」
すいぶんと絶好調みたいね？」

「… も、杏さん？」

春原が恐怖で硬直する。俺を見ていた両目は既に何も映していない
かった。きっと、待ち受けの惨劇が頭中で再生されてるんだろう。
「何かあたしのこと色々言ってたみたいだけど、よく聞こえなかつ
たからもう一回言つてくれる~？」

二二二

春原の背後に立つ杏が、春原の耳元に顔を近付ける。俺から見て
も恐いんだから、春原なんか地獄だろう。

「それに勝手にあたしのお弁当に手え出してたわよねえ？」 美味し

かつたあ?
「

「は、はいい！ 僕なんかには勿体ないくらいの味でした！！」

ぐぐ、と哲の手に力が入り、指が春原の肩に食い込む。恐怖に

「あっがとうね～。お礼に、田んぼくじ抜いて、それ喉に詰めて寝
息をせてあげるから」

二二二二二二二二

杏の腕を振り払い、腕の射程から逃れた。しかし、安心するのはまだ早い。いつの間にか杏の手には国語辞典。攻撃範囲には十分入つてる。

「ひいっ！　岡崎、助けてくれえーー！」泣きそつた田で俺を見詰める。隙を見せらず、杏を警戒しながら。

「あ、おい春原。あそこにおへはい丸出しで走ってる美佐枝さんがいるぞ」

えつ！？

「うーしー！」

杏から意識を逸らし隙を見せた瞬間、無防備な鳩尾に国語辞典が叩き込まれた。

「くばあ……」

「あーて、どうしてくれようかしらー？」

一撃必殺の辞書投擲を真っ向から食らい倒れ込んだ春原に杏が歩み寄る。

（数分後）

「終わつたか…………」田と鼻の位置がおかしくなるほど殴られた春原は目の端に放つておいて、杏に向き直る。

「先に食べてて良かったのに。お腹空いたでしょ？」

「いや、待つてて言つたし」杏が俺の隣に腰を下ろした。

「そういうトコだけは本当に律義ね」

「褒めてんのかケンカ売つてんのか全然分からんのだが

「褒めてるつもりよ、一応ね。それじゃ、食べましょ「うか」

箸を取り、俺にも渡してくれる。もはや使い慣れた黒塗りの箸。それを握つて手を合わせる。

「んじや、いだきますと」

「いだきます」

空氣の冷たいクリスマスの屋下がり、杏手製の弁当に舌鼓を打つた。

でも、今日は杏編です。時事ネタにしたのは良いのですが、時間不足で下を書ききれず、とりあえず上だけでもクリスマスの間に投稿しよう、と中途半端なところでの投稿です。早々に下も書きあげますので、それまでお楽しみに。

自分でクリスマスネタを投稿しとしてなんですが、独りクリスマスは寂しいです、ハイ。と言つ事で、作者を慰めると思って感想や評価を頂けると嬉しいです。……と言つても、まだ上ですし、あまりCHANNADEっぽくない文体となつたなあと反省している今回ですが、では、下の方もお楽しみに。

「凄いな。味にこいつもよつキレがある…………よつな飯がする」「気がするんじゃなくてキレがあるのよ。自分の彼女の料理の腕くらい素直に褒めなさいよ」

口にポイポイ料理を放り込んでいく俺と杏。その弁当なのだが、これまた美味しい。文句の付けようが無いほど美味しい。いつものが文句の付けようがある訳でもないのだが、まあとりあえずいつもに増して美味しい訳だ。

「これ朝から作ったのか？　だとしたら相当な早業だ」

「残念だけど昨日の夜から仕込みはしてたわよ。さすがにこれだけの量は朝だけじゃ作れないわね」

ビニが嬉しそうに言つ杏。実際、料理をしている間は楽しいのだ
ら。

「…………と言つか、いつもは朝つぱらから料理してんのか？」

「冬休み入つてからはね～。あと、休みの日とかも。平日は多少は夜から準備してるけど」

だとしたら、多少は申し訳ない気分になる。俺はただ食つてばかりなのにわざわざ夜から準備をしてるんだとしたら割が合わない気がする。

「…………申し訳ないとか考えてたら怒るわよ」

「…………一応訳を聞いておこう」

「ほらの考え方を見透かしたかのように腕を組んで睨んでくる杏。「あたしは朋也が美味しそうにお弁当食べてくれればそれでいいの。割に合わないとか、迷惑だとか考えてたら殴るわよっ！」

「気を遣つて殴られるつてのも珍しい話だ。…………とりあえず悪かつた。そんな風に考えてくれるなんてな」

杏は俺の言葉と共に顔を赤くする。そこまで恥ずかしい事を言つたつもりはないんだが、どうやらツボにはまつたようだ。

「ふう…………」
「

「はいはい、お粗末様でした～。今日は我ながら良い出来だった
わねえ」

重箱を片付ける杏に手を合わせて礼を言つ。確かに今日はいつ
もよりも三割増しくらい美味しい氣がする。と言つが、実際美味しい。
「クリスマスの魔術つてのも怖いもんだな」人の味覚をも操作する
のか、それとも杏の気合を弄つてるのであるのか……

「ん？ 何か言つた？」

「何でもねえよ。それより、ここの後どうすんだよ？ 僕はまだ補習
と就活残ってるんだが」

別に杏は学校に用がある訳でもなし……さて、ここのまま帰るん
だろうか。

「どうしようかな～？ あたしは別に学校には用も無いし……」
腕を組んで何やら考へてる。……が、しかし、その目が不意に
見開かれた。

「…………？？ どうした、杏？」

「えつ！？ あつ、うつん。…………な、何でもないわよつ……！」

あからさまに何でも無くない顔をする杏。ここのまことになつて
も嘘をつくのが果てしなく下手だ。

何か知らんが、胸元を両手でサワサワしてゐる。何か探してんのか？
「嘘つけ。何だよ、その慌てぶり。何か、用事でも思い出したのか
？」

「え、う、うん…………そ、そり。確か用事があつたのよ」

「どうも妙だ。杏がここまで慌てるのも珍しい。と言つが、ここの
がここまで慌てたのを見たのは初めてかもしない。

弁当忘れようが、教科書忘れようが、体操服忘れようが、たいて

いは誰かに借りたりして慌てる事なんか微塵も無い。そして、その被害者の大半は春原、まれに俺だ。はた迷惑な話だが、とりあえず、学校生活じゃ何かあつても絶対に慌てることはない。

「……………？？？」久々にハテナマーク三本だ。
だが、杏は眉を潜める俺から逃げるかのように立ち上がり、
「ゴメンっ！ ちょっと用事あるから先に帰る。じゃあね」と、俺の返事も待たずに弁当箱を引っ掴み、校門へ向かって走り出しあがつた。

「……………訳分かんねえ。何だつてんだよ？」

勝手に帰るのはいいが、残されたこっちの身にもなってくれ。寒空の下、一人で首を傾げてんのも虚しいもんだぞ。

「仕方ねえ。教室に戻るか」さすがに何も無い中で北風に当たり続けるのは体に悪い。面倒だが、暖房のきいた指導室に戻るか。

（数時間後）

「ぐあ……………頭痛え」

新鮮な外気を肺いっぱいに吸い込む。机に向かい数時間と言うのは馴れてない人間にとつては拷問に近いものがある。しかも暖房を入れた密室だ。寒くなるから、と窓を開けなかつたがお陰で空気は淀んで頭が痛い。自業自得とは言え、クリスマスにこれは酷すぎる気がする。

「……………りやあ早々に進路決めちまわないと酷いことになるな」進路決定まではこの拷問に耐えなければならない。それはマズイ。精神的にマズイ。

「……………杏もなんか急がしそうだつたからな。先に帰るか」用事がある、つてことは少なくともこの近辺にはいないだろ。校内にい

ない以上、町に繰り出してもうと叫び訳で、わざわざ探すのも面倒だ。……と言つたところでやることなんかありやしない。選択肢としては、家に帰る、春原をイジメに行く、があるので……虚しに。虚し過ぎる。

「……やっぱ杏誘つときや良かつたな」彼女持ちのくせにクリスマスに一人きりなんて我ながら何考えてんのかさっぱり分からん。だがまあ、ここで北風に晒されてるのも寒いだけなんで、どつか行くとしよう。

（商店街）

……来てから気付いたんだが、どこに行こうと一人だと虚しいだけだ。普段は寂れてるくせに今日に限って赤やら青やらに照らされている。

「全く……聖人の誕生日なんか祝つて何が楽しいんだか」無宗教大国、日本。一般人がイエスさんの誕生日を祝う道理なんか無え筈だが。

「…………あれ？ 朋也君？」
不意に背後から聞き慣れた声が。振り返るとマフラーを揺らす棕が紙袋を抱えて立っていた。

「棕…………どうしたんだ？ 買い物でもしてるのか？」手に持つ紙袋からは様々な物が顔を覗かせている。

「あ、いえ。お買い物はさつき終わりました。今は勝平さんを待つてて……」

「勝平さん？」

「あ、い、いえっ！ 何でもないです……」

棕の言葉が力無く消える。久々に顔を真つ赤にしてるのを見るが、まあそれはそれで元気な証拠か。

「とつ、とつりで、朋也君はお姉ちゃんとは一緒にじゃないんですかつ？」

「いや、杏は飯食つたら何か慌てて帰つちました。……大体一時くらいか？」

春原をシメていた時間を入れてもそんなもんだろう。昼飯は一人で食つてた訳だからそこまで時間もかからない。

「一時……じゃあ入れ違いになつちゃったのかなあ？」

「？ 棕、一回学校に来たのか？」

「あ、はい。お姉ちゃん忘れ物してつちゃつたから、学校まで届けに行つたんですけど……」

肩に下げたポーチに片手を突つ込み、ゴソゴソと漁る。そして、そこから取り出したのは……

「……ペンダント？」以前、杏に買った紫水晶アメジストだった。

「お姉ちゃん、出掛けるときは必ずこれを着けていくんですけど、今日は何か忘れちゃつたみたいで」

「……てことは、アイツ、ペンダント落としたと思つて慌てて探しに帰つたのか」

それなら、ある程度は合点がいく。間違いかう買つたペンダントだが、紛れも無く俺から杏への初めてのプレゼントだ。変に義理深い杏のことだから、俺に悪いと思って大慌てで家に戻つたんだろう。んでもつて、胸元を弄つてたのは、ペンダントが無いのを確認するためか。

んで、そのブツは棕の手にある訳で。家に無いのを見て、今も自分が通つた道を探してゐるんだろう。

「だとしたら……」

とつと探し出してペンダント返しちまないとヤバイな。この寒空の下、足元見つめて徘徊するのは体に毒だらう。

「悪い、椋。ちょっと杏探してくるわ」あいつがいつも通りの通学路を通りてんだったから、学校から戻つていけばいつか会つ筈だ。

「あ、朋也君、待つてください」

「ん? どうした?」

不意に呼び止められた。椋は何かを考えるようにして、数秒後、俺に右手を突き出してきた。

「あの……お姉ちゃん探すんでしたら、このペンダントも持つて行つてもらえませんか?」鎖に吊され、小さく揺れるアメジスト。優しく、紫色の光を煌めかせながら俺に手渡された。宝石の冷たさが肌を刺す。

「ああ、了解。色々とサンキューな、椋」

「いつ、いえ。大したことはしてませんから」両手を振つて若干顔を赤くする椋。

しかし、うかうかしてられない。あいつん家まではバイク通学しちゃくなる程の距離がある訳で、徒步で探してたらどれだけ時間を食うか分からん。とつとと行かないといつも体冷やす事になる。

「急いだ方が良いな」

時計はDec 25、五時半を指している。となると、四時間半も探し回つてる計算になるが……

「…………十一月、二十五日、か」

しかし、今からそんな気の利いたことをしてる時間はあるか? 一刻も速く杏を見つけなくちゃならんのに……

「…………」

だが……偶然か必然か、クリスマスと言つことで神の導きか、調度良いものが調度良いところにあつたりする。

「チツ とつとと買つてしまつて杏探すか」

ドアに付けられた鈴の鳴る音を耳に、店の奥を目指して早足に歩を進めた。

（三十分後）

「せえぜえ……」

何でこんな一生懸命に走ってるんだろうか？ いつも走る必要はないだろ？

「…………チツ」 どつも、寒空の中、とぼとぼと歩きながらペンドントを探す杏の姿を想像すると、歩いてなんかいらぬかった。

「どつも、今日の俺は変だな」

んまあ、んなことは朝っぱらから分かり切ってたんだが。妙に感傷的になつてやがる。我的事ながらどうしたもんか？

「 探すしかねえ、か

探し出さない事には何も始まらん。とりあえず、杏の家まで逆走してくしかねえ！

「せえぜえぜえぜえ……」

そろそろいい加減にしてくれ。そろそろ杏ん家に着いちまつさ。

俺は俺でここまで走り続ける事も無いだろ。何をやつてるんだか。就活ですら真面目にやってなつてのに……ああもう… さつきから頭の中でグルグル回りやがつて！

「上手い具合にすれ違つてたとしてもそろそろ遭遇する筈なんだが

「

いた。とぼとぼと辛氣臭い顔ではあるが、あの中途半端に伸びた髪、左側を束ねた白いリボン。あの姿恰好は例え、双子の妹の棕であつてもすることはない。……妙にテンションが低いのが気

にはなるが。

「…………まあ仕方ねえか」何しろ、探しても探してもペンドントが見つからないのだからローテンションになるだらうよ。誰かに拾われちまたのかも知れないのに、探して探して、やつぱりまだ探して それでも見つからない。

「はあ」 とりあえず、何と言つか バカな奴だ。

「おい、杏一」

「えつ…………？」 とも、や ？」

調子が狂うほど元気の無む。こんな顔してんのは、あの時…… 雨に打たれて商店街の近くの空き地で佇んでた時以来か？

「何やってんだよ？ こんな寒い中、とぼとぼ辛氣臭い顔して歩いてよ」

「べつ、別にアンタには関係無いわよ…………」

といとん嘘の下手くそな奴だつた。いつもなら怒鳴る返答を、そんな語尾が消えそうな風に言われても説得力の欠片もありやあしない。春原でも連れてくれば元気になるんだろつか？

まあ、そんな事はどうでもいい。とりあえず、駆け寄つて制服の上着を杏の肩に掛けた。

「んで？ やつさから何探してんだよ？」 と、まあ聞かなくともいいようなことを聞いてしまつのは氣まぐれか。

「…………」

「は？ 何か言つたか？」

風も強く、人通りが無いとはいえ、『にじよ』によ眩かれて聞こえない。

「…………ペンドントよ。あんたが買つてくれた…………」 再び、

語尾の消えかかった杏の言葉。やれやれ、推測は正しかつた訳だ。こりや、棕にマジで感謝しないとな。

「落としちゃった、みたいなの……ずっと探して、家も探して、全然見つからなくて……」

今にも泣きそうな杏。と言うか、マジで泣き出す五秒前、な顔してるんだが。そんな顔されたら一番困るのは俺なんだが その辺もちつたあ察してほしいんだがな。

「ペンドントつて、アレか。アメジストのやつ。……そんな躍起になつて探すほどのもんのか？」

「あんたねえ アレはあたしがあんたに貰つた最初のプレゼントなのよ。それを探すほどのもんのか、つて……」更に泣きそうな顔になる杏。ヤバイ、とつとと何かしようとマジで泣かれてしまう。

「はあ……棕と間違つて買つたプレゼントなのに、か？」

「当たり前よ。そんなの関係ないわ。あたしにとつては本当に大切な物なんだから」

何と言つか、本当にバカな奴だ。間違いで買つて、散々コイツを傷つけちまつた後に渡して、そんな物を大事にしてるなんて。

まあ、嬉しいと言えば嬉しいんだが、もつと他にも大事に出来るもんがあるだろうに。

「……なあ、そんなに大事なものなのか？」

「当たり前だつて言つてんでしょ！ あんたも少しは考えなさいよ！！ あたしがどれだけあんたが好きで、あんたから貰つたあのペンドントを大事にしてたか知らない訳つ！？」

少しは元気が出たようだ。まあ、怒つた杏の顔なんか見慣れたもんで、どうせなら別の顔が見たい訳で。「どうしてもアレじゃなきゃダメなのか？ なんなら新しいの買つてやるぞ？」

「ダメつたらダメなの。あれ以外じゃダメなの……」

「……はあ。なら、仕方ないな」

そう呟いて、杏の首に腕を回す。首の裏つ側のとじで金具を止め

て、その首をアメジストで飾り立ててやつた。

「えつ…………？ 朋也、これ…………？」

「椋から預かって来た。お前が家に置き忘れて、椋がそれを届けようとしてたみたいなんだが、すれ違つちまつたみたいだな」見直してみると滑稽な話だ。焦る気持ちが杏を追い詰めて、姉想いの椋とはすれ違つちまつて、軽く言つなら自爆としか形容できないうな状況だ。

「良かった。ホントに良かった…………」

弱々しく呟き、顔を伏せてしまつ杏。その眼には夕日に煌く雲が浮かび上がってきて……

「お、おい、泣くなつて。泣かれて困るのは俺なんだぞ」

「でも、安心したら止まんなくて…………」

「どうも、女の涙つてのは間近で見るとインチキくさい。何がインチキくさいかって、そりやあ男のプライドだのポリシーだの、その辺りのモノを粉々に碎いちまつような破壊力が、だろうよ。

「んじゃ、喜ばせれば涙は止まんのか？」 そうだけ告げて、その右手を取つた。ポケットに手を突つ込み、箱を開けてソイツを取り出す。

「どうせなら新しいものでもねだれば良かつたのによ。これはこれで別なもんなんだが」

そして、その薬指に嵌めてやつた。ペンダントとお揃いの、アメジストの小ぶりな指輪を。

「えつ？ これって…………？」

本日三回目の「えつ？」だが、その辺は気にしないでおいてやろう。杏は、指輪と俺の顔を交互に見ては眉を潜めてやがる。

「クリスマスプレゼントだ。まあ、さつままで俺も忘れてたんだがな」

～三十分とちよつと前～

「いらっしゃいませ～。どんな物をさがしてゐるんですか～？」

「あ～、すみません、アメジストの指輪つて売つてますか？」

商店街。棕と別れ、すぐにでも杏を探しに行こうとしたんだが、どうも両手が暇してた訳で、ペンドントを買ったあの店に入つた訳なんだが……一人で入るのは一度田だつてのに、どうも落ち着かない。

そして、目の前には舌つ足らずな感じの少女が、淡い銀色の髪の毛はどこの国の出なのか？

「わふ？ アメジストの指輪ですか？ え～っと、確かに在庫あつたと思ひますけど……サイズはどうしまよつか？」

「はい。サイズ……え～っと

思い出せ。杏と手を繋いだ時、どんな太さだつた？ 僕より格段に細かつたのは覚えてるんだが……

「俺の小指くらいの太さでいいですか？」

「はい、少々お待ち下さいね～。ただいまお持ちいたしますのでー」店員がパタパタと中に引っ込んでいく。その隙に財布の中身を確認する情けない俺。

ひの、ふの、み……よし、諭吉が一人に野口が七人いれば何とかなるだろ。ところで、なんで諭吉は下の名前で呼ぶのに野口は英世つて呼ばれないんだらうな？ つて、そんなことはどうでもいい。

「お待たせいたしましたー。ちよつと一つ残つてたんですよ。お密さんラッキーですねー」

「は、はあ、どうも「せうせう」でもフレンドリーな店員だつた。そして、今更ながらさつきの「わふ？」とは何ぞや？

「お会計、一品で 円ですよ～」

「あ、はい、ちよつと待つて下さい」どうせやう、諭吉の出番は無か

つたようだ。さらば野口 × 人！ ちなみに募金して貯じやないからその辺は気にしないでも何の問題もない。旅に出る訳でも無い。「毎度あり～、です。それでは、クリスマス、頑張ってくださいね～。ファイト～、ですよ～」

いやいやいや、何だこの店員は？ キヤウを混ぜるのは勝手だが、訳が分からぬから止めてくれ。

と、のんびりしてゐる暇は無い。とつとと杏を探しに行かねば。

と言う事で、色々とカオスな感じのする店員を残し、店を後にした俺だった。

（時間戻して現在）

「これ、わざわざ買つてくれたの？」
ザ・カオスワールドから戻つてくれればそこそこいるのは杏。田を潤わせながら指輪をしげしげと眺めている。

「ま、ついでだったからな。それに、クリスマスだってのに何も無いのは彼氏としてどうも情けないし」昼飯に色々こなつたし。ですがに何も返さないのは俺の主義に反する。

「…………と

「あ？ 何か言つたか？」つて、同じやり取りじゃねえか、やつきた。

「…………りがと」

「スマン。もう少しどカイ声で言つてもらえると助かるんだが」

…………そして、それが最後の楔だつたんだろう。杏の色々なものを溜め込んだ鍋の蓋を押さえてる。

「だから、ありがとつて言つてんのよ…！ 何度も恥ずかしいこと言わせんじやないわよ、この唐変木つ…！ 気のきいたことするかと思つたら次の瞬間にはこうだしつ…！」

杏のローテンションは慢性的なもんじやないらしい。こうもどうな興奮剤使つてもこう即効性を發揮しないだろつ。

「ふう…まあ、元気になつたじやねえか」

「当たり前でしょー！ あんたばつかにイイトコ取られたら堪んないわよ」

……理不尽かつ我が儘なのはこつものとか。どうせひ、杏、理不尽復活らしこ。

「……………」

「は？ どうに？」

こきなり腕をとられる。次の瞬間には強烈な引力がかかつっていた。「ここまでしてもらつて、あたしが何も返さないとでも思つてる訳？ ほら、とりあえず商店街行くわよつ…！」

「お、おこ、待てつて！ こら、杏！ とりあえず引っ張んなつ！」

！」

しまつた。もつ少しテンションが低いままにしておいた方がよかつたかもしれん。

だがしかし、復活しちまつたもんは仕方がない。付き合わないと色々怖い。明日の昼飯の豚カツの醤油が黒酢になつてたり、卵焼きが洋菓子顔負けなほどに甘くされたり……少なくとも、相当怖い事態になるのは確かだ。

「待てつて！ こんな時くらい俺に手え引かせり！ 情けないだろうが」

「ん？ そう？ あんたがあたしの手、引いてくれんならそれはそれでいいかな？」

どうにかこうにか、引っ張るのは諦めてくれたらし。

と

「 いや、何でこんなやつ取りをしてるんだろ？ 俺達は？」

「…………… ありがとな」

「 んあ？」

「 何でもない。ほり、行きましょう。 あてのない探し物で時間無駄に食つちやつたんだからー。」

腕を絡めてくる杏。 せつとき、何か言つた気がしたが まあなんでも良いか。

もう六時は回つてしまつてるが、夜は長い。 加えて、幸いなことに冬休みだ。 じのお姫様が満足するまでは付き合いますか。

ども、久々のCLANNADですが、今回は少し危険かもしだせん。

何が危険かと言う訳にもいきませんが、もし読んでる途中で危険だと感じたら読むのを止めるをお勧めします。

この短編を読んで、この夏休みの楽しみにが無くなつた！ などと文句をつけられても作者には賠償の方法がありませんので。では、取り敢えず上だけですが、最後までお付き合いいただけたら幸いです。

草野球編「古河ベイカーズ再々結成」 - 上

（月×日）（日）光坂高校・グラウンド

「 オイ、オッサン！」

「 ん？ あんだ小僧？」

「 これは何だ？」

「 何つてお前 ファーストミットだろ？ 見て分かんねえのか？」

「 んな事は見れば分かるつ！ 僕が聞きたいのは、これを俺に渡して何をしたいのかと聞いてるんだ！」

「 あんだ、んな事も分かんねえのか？ 」このメンツを集めてする」とと言つたら一つしかねえだろうが」

人指し指をぐるりと周囲に向けるオッサン」と古河秋生。そして、その先にいるのは中一から社会人までのバラバラな顔ぶれ。

「いや、何がしたいのかは分かるんだが、……そうじゃなくて、何が目的で集めたのかつて聞いてるんだつ！！」

「馬鹿かテメエはつ！ 九人プラス応援団つて言つたら、野球やるに決まつてんだろうが！！」

……ああ、空が高い。毎々いままでにスポーツ日和だなこの野郎。

そしていきなりの急展開で悪い。文句なら後でオッサンが受け付けるから、今は黙つて受け止めてくれ。

ぐるりと周りを見回す。そこには「まあ、取り敢えず挙げていくとだな……」

春原、杏、智代、美佐枝さん、芽衣ちゃん、芳野祐介、風子、藤林椋、古河親娘、オッサン、そして俺

そう、このメンツが揃つたら何をやるかなんて一発で分かる。一

発で分かるのだが、な。

「野球やんのは分かつてんだつ！だから、何で野球がやりたいのかを聞いてるんだつ！…！」

朝一番で、

『オイ小僧。今日の正午、テメエの高校の校庭に集合。一秒でも遅れたら早苗のパン喰わせるから、覚悟しどきな』

と、謎のモーニングコールが入つた訳だ。無論、ふけることも考えたが相手はあのオッサンだ。逆らつた場合、どんな報復が俺を待つているかなど考えるまでもなく分かる。いや、正確には分からんが、どのくらい恐ろしい事になるかどうかは分かる。

「そりやあお前、そんなの決まってんじやねえか」

そして、俺の怒鳴り声に引くことなく眼をキランと光らせるオッサン。年甲斐もなくカツコイイから困る。

「無論、やりたいからだ」

「…………」

ダメだ、このオッサン。どこからツツコんで良いのか分かりしない。ほら見る、杏だつて唖然としていつもの神速ツツコミが無いだろうが。

「あのや、色々言いたい事は朋也が全部怒鳴つてくれたから良いんだけども」

場の空氣に耐えられなくなつたのか、真つ先に口を開いたのは杏だった。

「相手とかどうなつてる訳？まだ来てないみたいだけど、ちゃんと呼んである訳？」

「当たり前じやねえか。相手がいなくて野球が出来るかつてんだ。ちなみに、前みたいによい子の為の野球教室じやねえぞ」

んなことは分かつてゐる。また、あん時みたいにガキの相手しろつて言われたらそれこそぶちキレてやる。貴重な休みを一日消費できるほど俺はまあ、暇か。だが、いきなり呼び出されて、のほ

ほんと野球を教えてやるほど俺は寛大でも上手くも無い。

「どうやって芽衣まで呼んだのか知らないけど…………強いの？ その相手チームの連中」

そして、金髪野郎が杏に続く。何をとち狂ったのか、コイツは地味に楽しそうな顔をしてやがる。

「ああ、強い。と言うか強いらしい。噂に過ぎないがな。まあ、前にやつたオッサン相手よりは強いみたいだぞ」

「前のつて 甲子園ピッチャーがいたチームだよな？ 私達だつてしばらく野球やって無かつたんだぞ？ いきなり出来るのか？」これまたやる気っぽい智代。バスバスとグローブを叩きながらオッサンに尋ねている。

「ん」 ま、大丈夫だろ。ライトとキャッチャーはともなくして、それ以外は中々のメンツだ。今回は俺が下がることも無えだろうしな

「ライトって……風子ですかっ！？ 風子はともかく扱いなんですかっ！」 ショックですっ

「僕もともかく扱い！？ 僕ほどの天才を捕まえておいてその言い草は何っ！？」

オッサンの言葉に騒ぎ立てる風子と春原。 つて、オッサン、風子を呼ぶ時、一体どうやつたってんだ？

「全く、仕事の休みを狙つたのかどうかは知らんが、朝にいきなり呼び出すのはどうかと思うぞ。俺だって人間だ。休みたい時には休みたいんだ」

「…………でも、どうのこうの言つて來てるじゃない、アンタも。

「はあ、何であたしもこんな事に律義に付き合つてるとかねえ？」

深く、本当に深く溜め息をつく芳野祐介と美佐枝さん。しかしオッサン、本当にこの二人をよく誘えたな。

「私は、芳野さんさえいれば何でも良いですけど。それに、鉄壁のセカンドとまで言われて、断れる筈ないですしねー」

芳野祐介をキラキラした目で見つめるのは春原の妹とは到底思え

ない芽衣ちゃん。 と言つた、コイツを呼んだのはいつなんだ?
? 流石に、朝一番で呼んで正午に間に合ひまじ、春原の実家は近くないぞ。それと、勧誘の仕方が大分違つよつた気がするのは俺だけか?

「あ、あのお父さん。流石にこきなり呼んでおいてその態度はビデイと思つんですけど」

「お姉ちゃんと一緒に来つて言われたんですけど 何ですか、この状況?」

そしてオロオロしている古河と藤林。背後には古河母こと早苗さんは笑顔のままだ。と言つた、応援団つてこの三人のことか?

「ああ〜! どうこつもこいつも文句ばっか言いやがつて! 口を開いて言つ事は文句しかねえのかこの野郎つ!」

いきなり怒鳴り出すオッサン。と言つた、文句を言われて当然の行動を取つてゐるんだから仕方ないだろつが。

「分かつたよ。テメエらが納得しねえつてんなら
「納得しないつて言つなら?」

何故かタメるオッサンに首を傾げる杏。そして、開口。そこから飛び出してきた言葉と言つと……

「今日! 相手の連中に勝つことが出来たら、何でも好きな食いもん奢つてやるつ!! 早苗のパンとか早苗のパンとか早苗のパンとかつ!!」

「いらねえよつ!! と、全員が心の中でシツコんだであろうその言葉。反響しないグラウンドで、取り敢えず全員が聞き取れるくらいには響き渡つた。

「結局メシで釣る訳か。…………まあ、どうせ暇だったから俺は何でも良いけどな」

ここまで来たらもう開き直つた方がいい。大体、バカ正直にここまで来たのも、まあ少しあつてもいいか、と言つ気分であつたからであつて。

「岡崎っ！ お前はいいのか、そんなに簡単に流されて！！ 僕達はともかく扱いされたんだぞっ！！ これを認めたら負けだぞっ！」

そしてうるさい金髪。まだそんな細かい事気にしてやがったのかこのアホは。そもそも、ともかく扱いされたのは“僕達”ではなく、お前と風子だけだ。

「まあ そうね。」飯箸ってくれるなら、やつてあげてもいいか

「最近は生徒会で身体を動かしてなかつたらからな。運動するのも悪くは無いな」

そして主力である女二人もスイッチに入る。この無敵のショートとセンターがいれば何となりそつた気がするのは気のせいじゃないんだろうな。

「確かにここまできたらヤケだな。それに、ピッチャーが全開なら外野まで飛んでくることも無いだろ？ しな」

「セカンドは少し大変そうですが……芳野さんがいる限り、私も頑張りますよ」

俺と同じく半ばヤケになつてゐる芳野祐介と、それにつられる芽衣ちゃん。と言つた芽衣ちゃん、扱いやす過ぎるぞそれは。

「あたしはサードだつけ？ はあ、ベースカバーとかタッチアップとか面倒そうだけど まあ良いか。どうせ帰れそうにないし」

「風子には野球の神様がついてます！ ライアーフライだけは任せてくれださーい」

「ちょっとみんなっ！？ 何でそんなにあつさり受け入れてるの！」

？ いいの？ 野球だよ、野球！ この前まではみんな嫌々面倒くさそうにやつてたのに、何この心境の変化はっ！？ 特に杏と智代っ！ お前らまで認めたらソッコミ役がいなくなるじゃないか！！

スタメンフルメンバー（マイナス）が了承していく中で、春原だけが最後の階になつていた。と言つた、最初はやる気だつたくせに、何なんだお前は？

「大体！　僕をともかく扱いしておいて、その程度で誘えると思つなよつ！！」

「お前、そこまでしつここと逆に白けるぞ。それに、帰りたいなら帰ればいいだらうが。誰も止めやしねえつて」

「いつは一体何がしたいのか？　そんなに嫌なら帰りやいいつてのに。そこまでズルズル引つ張りやがつて」

「えつ！？　あつ、いや　　えくつと……」

そして今度はビビつたりオロオロしたりと拳動不審に。いつもからアホ丸出しの春原だが、今日はいつもの増してビバ！。いや、ヤバイ。

「ヤバイって何だよ、ヤバイって！？　僕だつて野球やりたくない訳じやないやい！！」

「人の心読むなよ。大体、やりたいならやりたいで良いじやねえか。全く、素直じやないな、陽平君は」

「陽平つてお前が言うなつ！　気持ち悪くなるだろつ！？」

何かいつものペースになつてきた。それを見守る生暖かい視線視線視線……

「岡崎さん、やつぱり春原さんと仲良しですつ」

「教室でもいつもあんな感じなんですよ。授業中でもやることがあるから困るんです」

クスクスと笑う古河と藤林。ううん、この一人つて見るからに波長合ひそうだよな。どつちもほんわかしてゐし。

「おつしゃあ！　全員が快諾したところで、そろそろ相手チームがお着きになるそだぜつ！！」

「きなりオッサンが携帯片手に怒鳴つた。誰も快諾などしていい、と言つツツ「ヨミ」を誰もが耐えたと言つ事実は言つまでもないが。「そんでは、相手さんは前みたいなオッサン方？　前より強いとかつてたけどよ？」

前の甲子園ピッチャー以上となるとなかなかなものだ。あの変化球の山は相當に嫌らしい球だつたし。

「いや、学生だ。お前達とそう変わらん年齢だつて聞いてるが

「あたし達と変わらないつて……まだ高校とか大学生だつて言ひつの？」

俺や春原、杏や智代を見ながらオッサンが告げる。そして、真っ先に反応したのは杏だつた。

「高校か大学かと訊かれたら 少し困るな」

「 ？ 何でだよ？ そいつらの学校の名前、きいてねえのか？」

別にどこから来る学校だつと関係ないのだが、流石に身元不明の学校相手に試合するのは気が引ける。

「いや、違う。何て言うか アレだ、明確に書いちまつとソフ倫に引っかかるつちまうからよ」

「……………は？」

「それにそろそろエクスター版が出るからな。そういう学校云々の問題は非常に厳しいんだよ、今の世の中」

「えへつと？ 取り敢えず、誰が来るのかは大体分かつたが、どこからシッコんでいくべきなんだ、この状況？」

「……………何でそんな裏事情を表に引っ張り出してくるんだお前はつー？」

と言ひ事で、この奇妙な空氣からシッコミを入れてつべことにした。

「何でつて、仕方ないだろ？ 時事ネタチックにこの展開になつてるんだしよ」

「時事ネタつて 何なの、今回？ いつからいついつ雰囲気なヤツになつた訳？」

オッサンの言葉に杏までシッコミを入れ始めた。いやさ、流石にこの展開だけは誰も予想できて無かつたようだし。

「期間限定の時事ネタなんだからいいじゃねえかっ！ 文句ならこんな状況を考え出した奴に言いやがれっ！！」

そして逆切れするオッサン。いや、だつたらそう言つ不用意な発言をしなけりゃいいじゃねえか。

「つまりさ、それだと来る学生つて言つのは……やつぱアレ？」

「だらうな。実力まではよく知らないが、確かにアレだな」
美佐枝さんと芳野祐介が難しい顔して唸つてゐる。この二人を同時にここまで唸らせるつて、相手のチームの連中が恐ろしい。

「面識は無いですし、名前を知つてゐるくらいなんんですけど
「僕達レベルにアレな連中だからねえ。これはちよつと、コテンパンに叩きのめした方が良いんじゃない？」

春原兄妹もそれぞれの反応。そして春原兄の方は色々と訳の分からん「メントをしてやがる。

「 同じような幻想の存在として、風子は負ける訳にはこきません」

「幻想の……存在？」

突然の風子の謎の言葉に首を傾げる智代。そして、訳が分からんのはみんな同じらしい。きょとんと首を傾げてゐる。無論、俺もだが。

「風子は幻影、彼らは虚構世界の住人。ビツチも幽霊みたいなものですっ」

「こりゃこりつ！ 危険な発言をするなっ！ そのシナリオ云々にひつかかるネタばれ兼枠越え発言は禁止だつ！！」

それを語るのは俺達の仕事じゃないし。相手方が来たらその辺は任せちまえば良いんだよ。

そしてその時、校門の辺りに何やら奇妙な集団が現れた。あれは

黒の制服か？

「はあはあ…………ふええ、暑いよお」

「こんな坂道の上に学校を建てるなんて

開校した人は何を考

えていたんでしょ？」

顔やら何やらは見えないが、声だけは少しだけ聞こえてきた。

「つて、この声、明らかに女の声だろ？」

「きょ、恭介…………こんなに遠いなんて聞いてないよ」

「こんなに遠いから朝一で寮を出たんだよ。この程度でへばつてる

ようじや、内のチームのスラッガーは任せられないぞ、理樹」

「だから、僕より恭介や謙吾の方が飛ぶんだから」

そして今度は野郎の声。…………と言つても、二つの声の内、一つは女みたいな声をしてる訳だが。

「真人くん　　そんなにバッドとか重そうな道具持つてて重くないの？」

「重そうに見えるなら少しは手伝おうとは思わないのか、三枝つ！」

流石の俺でも　　「この量はキツイぞ」

「はつはつはつ、真人少年にとつてはいいトレーニングになるだろう？　目的の高校までは着いたのだ。もう一息だぞ」

今度はその向こうからデカイ男と女が一人。男は…………何か、野球に使う道具を山のようにならへてるんだが、アレは大丈夫なのか？「真人つ！　その程度で音を上げるなんてだらしないぞ！　それでも俺達の筋肉担当かつ！？」

「…………富沢さん、そう言つのでしたら、井ノ原さんを手伝つてあげてはいかがでしょうか？」

「美魚、そのバカにそんな事を言つても無駄だぞ」

何かもう、色んな意味で愉快な会話が繰り広げられている。

何か、俺達以上にアレな感じのチームだな、オイ。

「おっ、来たか来たか！　この古河ベイカーズと対等以上に戦える

ほどの野球チームが！」

「やつぱ……相手はアレなのか」

一気に気が抜ける。実際にあのチームを見たのは初めてだが、何て言つか、もうスタッフが変わって空氣も変わつたつて言つか

……いや、そうじやなくてだな。

「女の子ばつかねえ……ま、うちだつて似たようなもんだけどさ」「でも、何か私達より年下みたいだよ、お姉ちゃん」

藤林姉妹も観察中。と言つか、観察しているのは全員なんだが。「へんつ！ 僕より年下のくせに勝負を挑もうだなんて 無謀

な奴らだね。返り討ちにしてやるよ」

「うーん、あの男の人たち、みんなお兄ちゃんよりも年上に見えるなあ あと、年齢にツツコミ入れると危険だから控えてね、お兄ちゃん」

そして春原兄妹。と言つか芽衣ちゃん、そのセリフの方がよっぽど危険な氣がするのはきっと俺だけじゃない筈だぞ。

「風子としては、年齢なんかはどうでもいいんですが、風子だつて年上だつてこと、教えてあげますつ」

そして伊吹妹。何か兄弟姉妹率が高いな。公子さんもいたら三組だぜ。それと風子、お前、全つ然年上に見えないからな。

「えーっと？ 貴方が連絡をくれた古河さん？」

「おう、古河秋生。古河は三人いるから秋生さんで良いぜ」

「秋生さん、と。俺は恭介、棗恭介。こつちも棗は一人いるから恭介さんで良いぜ」

茶髪の、明らかにリーダー格の男が前に出てくる。うーん、

コイツだけ年上っぽい感じがするが。

「んじや恭介、そのチームが、俺達古河ベイカーズと試合をやつてくれるチームつてことで、良いんだな？」

「ああ。チーム“リトルバスターズ”、マネージャー込みで十人、間違いないな」

くはあ、ついに出てしまつたこの名前。もうひとつからツツ

「んでいいのか分からんじ。

「それじゃ、アンタがキヤプテンだつたら、マネージャーつてどうつなんだ？」

そろそろ俺達も会話に混ぜてもらわないと、状況についていけなくなるぞ、オッサン。

「ん？ 僕は別にキヤプテンじゃないぞ」

「はつ？ いや、どう見たつてお前がリーダーだろ？」

恭介とかいう男はいやいやと首を振っている。どこか面白そうな顔のくせ、結構本気で否定してやがる。じゃ、誰がキヤプテンなんだよ？

「…………僕がリトルバスターーズのリーダー と書つかキヤプテンだよ。理樹、直枝理樹」

「お前が？…………まあ、誰がキヤプテンでもいいか。それなりに理由があんだけうし、見た目で判断するのも危険か」

外見と中身が一致しないのは、既に杏と智代で経験済みだ。直枝つて奴も、実は隠された力があるとか無いとか

「恭介 疲れた。小毬ちゃんもクドももう倒れ掛かってるぞ」「鈴、取り敢えず人様の前だ。せめてもう少し妹らしく振舞うか、最悪女の子としての気品は崩さないで欲しいんだが」「却下。それより、小毬ちゃんとクドに何か飲み物をあげてやってくれ」

妹？ ああ、棗がもう一人いるつてのはそういう事か。しかしまあ、確かに女らしくは無い。外見はともかく。その辺り、杏に似て……

「朋也？ あんた今、何か失礼な事考えてない？」

「いや、気のせいだろ？ 多分、きっと、恐らく気のせいだ」

何か、色んな意味で恐ろしい言いがかりをつけてくる杏。まあ、取り敢えずその辺が第一に注目すべきところなんだが。…………まあ、女らしくない、と言つよりは鈴とか言つ奴のはぶきらぼうだけのような気がするが。取り敢えず、杏よりはマシっぽいが……

「…………朋也、もう一回聞くけど、失礼な事考えてないわよね？」
「いやだから、気のせいだろ？ 取り敢えず、俺は気のせいだと
思うぞ、うん」

それに、笑顔で拳を握り締めるのは怖いから止めてくれ。野球や
る状態だと、飛んでくるのは辞書じゃなくてボールになる訳で。当
たりどころが悪かつたらマジで死ぬぞ？」冗談抜きで。
まあ、岩に突き刺さるレベルの広辞苑も当たりどじにひにつけちやあ死ぬだ
ろうが。

Another View - Little Busters. 直枝理樹

「なあ、謙吾つち。あれが俺達の試合相手なのか？」

「どうやらそのようだな。あのオッサンがキャプテンのようだが
年齢層がバラけているな、このチームは」

僕の後ろで、真人と謙吾が何やら話している。と言つた、その膨
大な荷物を抱えたままで重く無いのだろうか？

「このチームの年齢が偏りすぎただけでしょ？。恭介さん以外は全
員一年生ですから」

「うむ、留学生もないことだしな。おねーさんとしては鈴君やク
ドリヤフカ君やコマリマックスは年下にしか見えないが……」

そして西園さんと来ヶ谷さんのツツ「！」。と言つた、来ヶ谷さん
は僕から見ても年上にしか見えない。

「自称お姉さんだけあるなあ

「ん？ 何か言つたか、理樹？」

僕の呟きに恭介が反応する。そして、目の前に並ぶ古河……秋生
さんと、朋也とか呼ばれてた人も首を傾げていた。

「いや、何でもないよ。

それより、この後どうするの？ 試合するのはいいにしてもさ」「取り敢えず、本気でやるなら僕達も制服から着替えて向こうのチーム 古河ベイカーズだっけ？ その人たちも準備は終わってないみたいだし。

「……ところで、今更だけどなんでベイカーズ？ パン屋でもやつてる訳？」

「そだな……俺達のスタメンはこの前と同じで良いだろ？ から、後は器具か。そっちはどうするんだ？」 チーム編成、終わってるのか？」

「チーム編成は理樹がやつてるから問題無いが ただ、装備は変えたいよな。俺達も、今回ばかりは本気で掛からないと無理そうだ」

恭介も僕と同じ意見だったのか、秋生さんの言葉にそう答えた。僕も小さく頷いて肯定の意を示す。

「ちょっと待つた」

「だけど、その瞬間に朋也が声を上げた。その場にいた全員が彼のことを振り返る。

「試合するのはいいが、その前に……審判はどうするつもりだ？」

♪ Another View End ♪

「試合るのはいいが、その前に……審判はどうするつもりだ？」
「この前はオッサンが手配したのか、そこそこな審判が揃っていたが、今回は誰も来れない。 どうするんだ、マジで？」

「ん？ ……ああ、ちゃんと手配はしてあるぞ。まだ 来てないみたいだけだな」

周囲をオッサンが軽く見回すが、どこにもそれらしき人はいない。

と言つたか、審判つてどこで手配するんだろうか？

「遠いから少し時間がかかるとか言つてたが……そろそろ着くだ

ろ。それまでの間に、俺達は準備を済ませておきやいいんだ」

「ん、まあそうだな。それじゃ俺達はどこで着替えれば良い？」

オッサンの言葉に恭介が訊き返す。

「そつか、ここにつけばこの生徒じゃないから、自由に動く訳にもいかないか。

まあ、俺達だつて半分近く校外の奴らだけだな。

「そうだな オイ小僧、どつか使える教室とか無いのか？」

「いきなりんなこと訊かれたつて……一応校舎は開いてるだろうし、休みだから教室も使ってないだろ。開いてる教室ならいいんじゃないか？」

つか、俺なんかは平日でも特別教室棟で昼寝してゐるし。春原なんかは、恐らくもつと自立つとこで寝てるだろうし。

「校外の人間を勝手に校舎に入れるのは少し問題があるが ま、何とかなるだろつ。私もいることだしな」

そして、生徒会長様のお墨付き。うーん、その応対は全校生徒の代表としてどうよ？

「分かつたよ。準備が終わつたら僕たちも出てくるから。それまで待つててよ」

「おら真人、謙吾、荷物持て。教室に移動だぞ」

智代の言葉に理樹が頷き、そして恭介が他の連中に支持を出していた。その恭介の言葉にぞろぞろと動き出す女ども。

「朋也ー！ ほら、いつまでもぼさつと突つ立つてないでよつ

「おら岡崎。もたくさしてると置いてくよ」

「そんで、杏と春原の声 つて！ お前らなんで勝手に移動してんだよつー？ つか、オッサンまでいないしつー！」

「チツ……おい！ 待てよお前らつー！」

まあいいか。試合前にカツカすることも無いだろつ。

（十数分後）

着替え、器具の準備、その他諸々を終えて再びグラウンドに降りた訳だが、相手チームの奴らはまだ来てなかつた。

もつとも、代わりになにやら見た事あるよつないような奴が数人を引き連れて立つてゐたんだが。

「おおつ！ 往人！ 来てくれたか？」

「はあ いきなりこんな僻地に呼び出すんじゃねえよ、秋生。

俺だつて暇じやないんだ」

「…………」

えうつと だな？ どつからツツ コんだら良いのかパート2。

つか、俺とキヤラ被りまくつてね、アイツ？

「ねえ岡崎、あの審判の人誰？ なんか、古河さんと仲いいみたいだけどさ」

俺がソイツを見ながら胡散臭そうにする春原と、にこにこしながら答える古河。……古河、流石に作品を超えた交友関係つてのはどうかと思つぞ？

「おら！ 俺の昔の友達の国崎往人だつ！」

「…………国崎往人。まあ、一応そういうことだ」

あ～？ もういい加減ツツコんだ方がいいのか？ それともここは敢えてスルーを通すべきなのか？

「あの この人、ちゃんと審判出来るんでしょうか？ それに

……何故か鳩尾に蹴りを入れたくなるんですけど」

だが、俺が敢えてツツツツミミを封印しようとしている中で、芽衣ちゃんがあつさりとツツツツミミをしまうといつ残念な状況。

「あんただ？ 俺は千年の夏を越えてきた男だぞ。その上、カラスにまでなったこともある。そんな俺に、審判ごときが出来ないとでも思つかつ！？」

「いやいやいや、その経歴の持ち主が審判できる方がおかしいから。そして、国崎の言葉に俺達の誰かがツツツツミミを入れるよりも早く、俺達の背後から聞き慣れない声が。

「ダメだよ理樹君、そこはツツツツミミじゃ。あの人にだつて、色々と事情があるんだよ。多分」

「そうだな。小毬の言つ通りだぞ理樹。お前のツツツツミミは最近鋭さを失つてて、俺は悲しいぞ」

そして、謙吾とかいう男と、そいつが小毬とか呼んでる女の、これまた微妙な「重ツツツツミミ」。

「しかし　この調子だと少しあの奴も出てきそうな気配だな」

「う勢ぞろい気味のこの状況だと、さりに年代を遡つて何か出来てもおかしくない状況だが……」

「ん？ うぐうと愉快な仲間達なら来ないぞ、朋也」

「は？ 何でだよ？ ……それに、うぐうと愉快な仲間達って……それに、なんで俺の名前知つてんだよ？」

大体、今のセリフだけで俺の考へてることが分かるんだよ、お前はつ！？」

「いや、まあこれ以上キャラのインフレを起こすのもなんだし

それに、もつと重大な理由がある」

『重大な…………理由？』

軽く肩を竦める国崎。それと、その深刻な感じでわざわざ揃つて

聞き返さなくていいからな、杏とか智代とか藤林とか。

「ああ。奴らを読んだら じくが一気に被るからな」

「…………いやいやいやっ！ そういう発言禁止だつてんだろつ！」

大体、もう既に被りまくつてるからつ……！」

さつきだつて芽衣ちゃんも前世の記憶が蘇りかけてただろうが！

それに、ハードにこだわらなければ今だけでも三重に被つてゐるぞつ！

「岡崎 ツツコミ役として頑張るのもいいが、一応人様の前だぞ」

「そうだな。理樹を見習つた方がいいな、お前は。芳野祐介の言つ通りだぞ」

「全くだ。流石は祐介と恭介。言う事が違うな」

「だああっ！ テメエらはそう一気に喋ると声が被るんだよつ！」

音声付だと聞いてる奴が混乱するだらうがつ……！」

「まあ、もしフルメンバー揃えようとしたら、声が物凄い事になるよね、多分」

「へつ！ 僕だつて千年前には剣の達人だつたんだぜ。今じゃ筋肉一直線だがな」

そして、理樹と真人がやつぱり危険な会話を。そう言ひや、お前も被つてたな、筋肉野郎。

「もう何でもいいでしょ？ バスターZの人も来たつてことは、準備はもうどっちも出来たつてことだらうし」

混乱し始めた場の空気を一気に斬り裂く杏の声。その言葉に、オツサンと恭介と国崎が一気に覚醒しやがつた。

「そうだな。準備万端、元気百倍。んじや、いつちよやるとすつか！」

「ほら理樹つ！ お呼びだぞ、キヤプテン。整列させろ整列つ！」

混沌と化していた空気が、一気に試合のものへと切り替わる。この辺り、オツサンとか恭介とかの力を示してゐるんだが やつぱ、

常人な気がしねえ。

「それじゃ整列。ファースト側に古河ベイカーズ、サード側にリトルバスターズだ」

そして、かなりやる気の感じられない国崎の言葉。ここに、本当に審判やる気あんのか？

「…………ま、細かい事は気にして仕方ないか」

オッサンの言葉が嘘じやなれば、あの女だらけのチームも相当強い訳だ。気を抜いてる訳にもいかないだろ。

「洋平っ！ ボール、後ろに流したら殺すわよ？」

「それさつきあの人にも言われたからっ！ 何でお前にまで言われなきやいけないんだよ、杏っ！…」

パスパスとボールでグローブを鳴らしながら、杏が笑顔でそう告げる。ある意味死刑宣告だが……頑張るんだな、春原。

「でもお兄ちゃんだからねえ せめて、今日は一本くらいいっつ打つてほしいよ」

「ダメよ芽衣ちゃん。いくら本当の事だからって、実の兄にそんなこと言つたら」

「いや相良。お前の方が酷い事言つてると思つんだが」

サブキヤラ衆三人がそれぞれにツツコミ三連弾。つか、芳野祐介と国崎もセリフがほとんど変わらんし。

「それじゃ、風子いきますっ！ ライトは絶対に抜かせません」

「いや、一回表は私達の攻撃だぞ。抜かせない前に、相手を抜くことを考えた方がいいぞ」

若干タイミングのズレた風子に苦笑しながらツツコむ智代。

智代のツツコミつてのも珍しいもんだ。

「お父さん、岡崎さん、頑張つてくださいっ！…」

「秋生さんっ、頑張つてくださいね！…………それと、他のみなさんもっ！」

「お姉ちゃん、応援してるからね

応援団衆も準備は出来たらしい つか、俺、今日初めて早苗さんの声を聞いたような気がするんだが。……まあいいか。

「おら、行くぞ、お前らつ！ 古河ベイカーズの底力、見せてやるぞつ」
『おおお～～～！』

オッサンの言葉に強く叫ぶ。リトルバスターZだか何だか知らんが、いや、まあ知ってるが、取り敢えず、何だろ?つと負けるもんか。

わざわざ出てきた休みの午後、むざむざ無駄にしてたまるか。

と言つ事で、リトバスとAIRです。と言つても、ネタばれチックなのはリトバスの方だけです。

そして、今回はあまりCLANNADっぽくない文章になってしまっています。内容も今までとは打つて変わってギヤグじみてますし。朝倉由那節はなるべく抑えたつもりですが、全然鍵つぽくない文章なのは今回ばご勘弁のほどを。

ちなみに、往人さんも祐介さんも恭介さんも、ハードによつては声が被るため、脳内再生する際にはご注意を(え

では、取り敢えず上だけですが、早めに下を書きあげるので、次回も読んで頂ければ幸いです。

下では完全野球全開なんで つまり半バトル展開なんで、朝倉由那文章が一気に活性化する恐れがありますw その辺が出てきた際はスルーでお願いします。

ではでは、次回もお楽しみに~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0745d/>

CLANNAD Short Stories -想ひ行き交う坂道で-

2010年10月10日01時46分発行